

## 春の疾風

群れて渦を巻きては高空に春の疾風に昵む如くに

蘇生

いくさ世の揺らぎの中に東風吹きて頬をやさしくねぶりゆくかな

茉莉花

願はくば踏みにじられしきさらぎのイラクの民に星よ光れと

真奈

たんぼぼに人などいらぬ生きるものすべてに星が輝くならば

海月

たんぼぼは千の眼でわれを撃ち不気味な一つ目はキュクロプス

真奈

晴れの日の花粉とびかう憂鬱に眼球だして洗いたきかな

蘇生

わが友は杉の花粉を浴びながら咽ることなく一人木を切る

弁慶

餓鬼大将杉の大樹をゆさぶりて花粉を雪と遠き日のこと

寂

たふたふと花粉滾らす杉の木いつもは知らぬ並木道かな

蘇生

千年のいのちを生きる屋久杉の瘤に瘤つき哄笑のごとし

しゅう

鹹(しほはゆ)し人も荒れ野も億年の血を嘗めてみる春の終りに

海月

聖人は荒野を好み修行せし我の願いは暖衣飽食

弁慶

バブル期の酒池肉林を愛でて今糖尿病を友の友あり

蘇生

帰雁せず病む友のいてこの川をわが故里と定めおきたり

海月

療養所のほかの記憶は幼少の故里ばかりひたすらに恋う

しゅう

時流れイラク支援の輸送艦わが故郷の港出でゆく

蘇生

故里は遠にありてと思いしも故里守る人ありてこそ

弁慶

いつの世も生きとし生きる同胞の褻の営みの重ね思ほゆ

蘇生

残り蚊がよたたた飛ぶや春曉に咳ひとつ出づこれも褻なるか

海月

美術館ゆく印象派からキュビズムへ春のかけらになつてしまおう

ぼぼな

シベリアを描きし香月泰男展涅槃の黒は心象風景

茉莉花

シベリヤの森林火災の危機を説くわが日本の若き科学者

蘇生

溶け出す永久凍土マンモスに跨る兵士打て！吾を打て

海月

キキキキー鉄の軋みし跨線橋別離のあとに夜汽車見てゐし

しゅう

莖立の背伸びして聞く遠汽笛鉄路のさきに何見えしかと

真奈

背伸びして競うがごとき土筆たち辺りに春を告げるが如く

弁慶

大瀬崎田子柿田川人穴か胸突く地の名土筆生ふるも

寂

雪なんぞ降る気配なく東京の暖かきけふ2・26の日

茉莉花

三寒も四温もあつて花もあり雪もあるうさ戦争だもの

海月

生まれてより一度も平和を知らざると語りしベトナムの少女忘れず

茉莉花

ジャスミンの香り豊かなひと時を戦の庭の子らに分けたし

弁慶

沈丁はせりあふやうに色なせりやがては宵の風になるらむ

蘇生

春の風片目のジャックさぶかるふ人を信じぬオイ猫よ来よ

海月

乱れたるサイレンらしき声がして寒さの猫にしかと春来ぬ

蘇生

乱れたる園にしあれど絵唐津の模様にしたき若草の芽よ

弁慶

火球の亡びの果ての水ありて下萌の声ぶつと止みたり

海月

ゆるらかに修二会の春は二月堂明くや参籠春はまことと

蘇生

二月堂三月堂を廻り来て若草燃ゆる山を見るかな

弁慶

まばたきに涙払ひて鹿の群見るふりしたる戒壇院脇

千種

このたびも幣を手向けぬ手向山三笠の山は草萌えにけり

弁慶

道の上に売らるるビーズの乱反射まばたきすれば別れの予感

たまこ

川渡る名残雪かよけふもまた瞬きばかりばかやるといふ

海月

名残り雪君と別れし丸の内赤きレンガの駅舎なつかし

弁慶

経済紙片手に髪をなびかせて颯爽と行くキャリアウーマン

冬扇

家事仕事請負ふ妻の履歴書を代筆しつつ弥生迎へり

丹仙

主婦業と無職の差異を思ひつつ職業欄にはいつも悩みめり

たまこ

旅先のネットカフェでリストラの情報交はすキャリア厳しき

真奈

自由業と名乗りつつも最初からフリーター-だよと思えば納得

弁慶

春をよぶ修二会行法俗の名はお水取りともお松明とも

蘇生

火と水の儀式の前に一膳の飯にて鶏に懺悔まゐらす

丹仙

オリーブの枝をくわえしかの鳩もウイルスにまみれる世も未なるか

弁慶

白飯をもちて供えし神の宮娘等中東へ赴く朝

寂

山の手線電車の窓より神宮の木々の梢の膨らむを見る

弁慶

人情は紙風船さ膨らんで流れるだけと山中貞雄

海月

帰る国無きが移民か帰る人無きが移民か風船流れ

ぼぼな

お茶の水さくら花散る聖橋神田の流れ春のうららの

弁慶

夜勤明け朋を呼ぶかやけものごえ最後の春に父は帰れた

海月

朝が来て昼が来てまた夜が来る昨日と同じが我れの幸福

弁慶

爽やかに目覚め夕べに瞑目し明日の健やか願う幸せ

蘇生

ささやかな小さき幸すら得られずに間に震える人々を思う

茉莉花

天城路や月ヶ瀬村の梅林の花の香に酔う我は幸せ

弁慶

金色の釘買ったよ三つだけ星が見てるよほら三つだけ

ぼぼな

ふらここに雀が三羽遊びあく金色空がお家へ帰る

海月

足で漕ぐふらここ空に舞い上がり空だけが見え雲だけが見え

弁慶

赤道の直下の空に聳え建つツインタワーを雲がなでゆく

蘇生

幻のバベルの塔は崩れ落ち金鷄ふたたび騒ぐまほろば

真奈

まほろばに若紫のスミレ咲きめぐる辺りの山笑いけり

弁慶

紫のにほへる妹と詠はれし紫野いまいつこにあらむ

茉莉花

紫野芋粥嚼る男あり褥おぼろに現も夢よ

海月

かの時の紫イモの美味しさよ今も忘れぬかの薩摩芋

弁慶

トゲトゲの実を割り開きおずおすと喰らわばなんと美味きドリアン

蘇生

ドリアンは旨きものよと父の言ふ腹の足しにはならないけれど

海月

臭き物皆美味なりとひとの言うキムチ塩辛ご免被る

弁慶

ビルマにてご免被る食い物は何一つなく飢えて死ねとか

海月

時の背を押す機械なら出力は臨界にせよ君に会いたい

ぼぼな

逢いたくば千里も一理益荒男よ松帆の浦の花を見に来よ

弁慶

背を押され松帆の浦を訊ねしがすでに虚しく花は散りたり

蘇生

見晴るかす明石の浦の夕霞逢はじと思ふ恋の悲しき

冬扇

ともし火のかすかな明かり遠くみし海峡へだつ恋や悲しも

蘇生

峠より君住む家の中庭にかすかに見ゆる白き木蓮

弁慶

久しきや玲瓏なりし波の間に伊豆大島を遠く望めり

蘇生

はるかなる安房のやまやま波の間に見え隠れする春の朝かな

弁慶

春色の伊豆の山々見晴るかす鎌倉山に花咲き初むる

蘇生

極楽寺東慶寺にも春の風比企が谷戸にもすみれ花咲く

弁慶

母葬る路辺にすみれまたすみれたしかあの子の十二のあした

寂

母逝きて四十九日の我が庭に白き木蓮咲きにけるかも

弁慶

いつの日か終は如何にと問われるれば花の下より春の海なり

蘇生

ごつごつと枝張り伸びて幹黒し紆余曲折のごと花の道

しゅう

奥入瀬の山毛櫨の林の中に咲く蔦温泉の山桜かな

弁慶

熱き湯に身をやきて階の急勾配にまた汗噴きぬ（蔦温泉）

しゅう

八甲田見下ろす津軽野はるけくも海の彼方に蝦夷が島ぞ見ゆ

弁慶

四月とて蝦夷地の春の遅々として捨雪重く川原を埋めり

蘇生

いにしえの三台丸山の高殿は蝦夷地に向きて航路見晴るかす

しゅう

この春は鯨群来なる報ありてなんと久しき季語の現実

蘇生

ラジオから「はるばる来たぜ函館」の唄流れ来る歌人の墓

弁慶

エイの尾の渡島と称す半島に蝦夷開拓の嚆矢を偲ぶ

蘇生

おそ咲きの然別湖の蝦夷さくら炉の炭赤く姬ますを焼く

弁慶

北辺の四方を知りたる君なれば蝦夷との縁は如何に有りなむ

蘇生

君子とは多能を恥じる事なりと無芸大食物見遊山す

弁慶

平かな全生園に「望郷の丘」盛り土の上の四方かも

しゅう

薄命の天才歌人啄木の歌碑は小さき望郷の丘

蘇生

桃李和歌連作百首歌集

第五五〇一首より五六〇〇首迄

平成一六年二月一八日より平成一六年四月五日